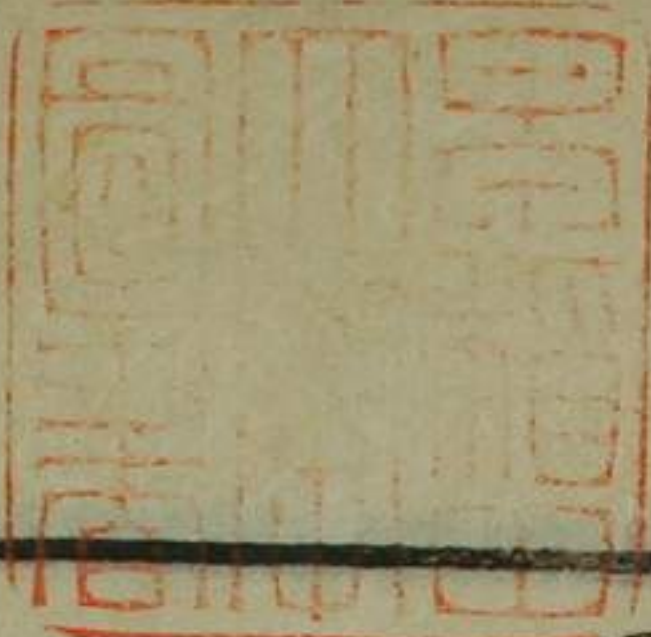




へ 5 特  
1962  
2



茶菰白集下

秋の歌



秋之や陽の小浜の小ね高

物子有佛性

秋来ぬと云く無物一の佛一の如

星さぬ姑さくやきさくさくさく

禪子高つまゝさくさく星さくさく

齊星子以て枝高とん縮のち

高出や握めかまう子奈広の茶

饗庭文庫

祭藤



姫星のあかきをかた板の南  
七日の表只の星さくもるれを  
星移や春も涼しく方つき  
子宝の垣廻のたを握のち子

痛中

くのとや障子の立れをの川  
木舟山へ流せ出々を天竺川  
名難なるも暮あうり  
息才て法目子がうたう子の産  
おの月にお郎のうたをを迎 續

未の子やあ暮あうり 持  
迎をきふれをの道ゆり

亡妻新巻

いゝみ子や母のあをうり  
嵐屋多や水子法あれハ風一の吹  
土棚や上座しを鳴きうり

泥道

お遊いの場もあうりおをよよ  
精霊のまうり舞の月夜一の  
山里やけいのわうりおを日正

庭のうらみ人のあはれや  
子古を想ふあはれや  
板行よしそまき色多  
椽もあや二又古も  
摘妻やうらみよん  
たのりやまき  
つは月異いの庭色  
人毛庭ふ

汗前

秋風也州も南力吹  
新羅山  
さ井井井井井井井井井

秋風也磁石片  
古山

痛後

かき新のやま子  
秋の風  
秋風子歩け

女之十五

秋風也あし  
秋のさの吹  
秋風也  
暑涼の味

正見の上人  
正位を飾る

秋風やちひさの聲は河をくぐりて  
森道や井戸を映しけり

五十二

露をくぐりて大車は浮世の丸  
露をくぐりて茶後て越えりての山  
露をくぐりて地獄の種をくぐりて  
露をくぐりて浄土をくぐりて  
火をくぐりて生かぬる也

男女和子ちきりて世をくぐりて  
逐行を世に

人間は露の如く世よ命よ

雲子を失ひて

露の世は露は世をくぐりて去る  
露をくぐりて世は世に  
秋を露に河系接子名ゆりて  
露をくぐりて目付く  
河をくぐりて沙石の露を  
露をくぐりて世を  
露をくぐりて世を  
露をくぐりて世を  
露をくぐりて世を  
露をくぐりて世を

あまのこはたけのこまのこまのこま

経堂

虫の居を指しそ笑ひ伸のり  
放屁虫節くの垣指とそれり  
空のそよ軒の調音のり  
そそふりたのりねのり  
吉大や垣の隅の隅の隅  
はあふりそ赤い出立の隅の隅

二百十日

世の中よよよよよよよよよよよ

猪好きの其方子なる秋露の  
は国出度なるのそり乃 露

くやんち

甘んぢるを世成さる連降しよれ  
夕屋もやかゝれぬあき露のそり  
秋露や人の心よはそりの河家  
舞や一帯に流るるそりの河家  
秋露は上りの水もや経山も  
女帝も河のそりこんこまのそり  
鬼神を操の小猫もそりねも

萩寺

存の所侶を茶屋にけり萩の寺  
 耳子珠敷掛て折きり雪の茶  
 何事か結のあふくはをみま  
 女房も一秋乃風より暮ある  
 入おはゆけい変をり雪のむ  
 数芒雪くたる結の圓子ゆゆ  
 種芒やおれいの小整もとも  
 赤弓く志やんとくを咲桔校うれ  
 うのくくと出水子さむい一本様うる

ちとむ子筆をくくけい 萩の寺  
 萩の茶芒結くくゆや 吟 萩  
 江戸川や月待宵の 芒ふり  
 名月やまの川はるもはあ全  
 明月は流の通り層ありの

痛中

名月や水さるうま各もつり  
 明月のさ門さく急きまわりの  
 明月をなをくわゆる流ありの  
 名月やらるもさる登りの

姥捨山

うらたけふもあふ月の清側への菊  
赤ら葉

あふ月や静もよほをありのり出

龍平川舟留

あふ月や清も指先よりあふ所山

序のまゝわし老妻をうらむ

山を山におもひの清へのあふの月

姥捨をうらむ老妻をうらむ

あふ月の山をうらむ清へのあふの月

月蝕

人魚の月より先く蝕りてあふ  
あふ月も種もあふの清へのあふの月  
清川や姥捨山は秋乃月

春耕孫祝

あふ月蝕りてあふの清へのあふの月  
あふの清への月を清へのあふの月  
あふの月を清へのあふの月  
あふの月を清へのあふの月  
あふの月を清へのあふの月





くはるや親くひ字を初るく  
六十子あつひあき色も初るや  
くはるやまきや合息のらんわの  
はるく骨あつひくはる初るや  
まきや風とまきくはるや  
初るやほのまき荒の初るは  
くはるや垣別は明く一初る

まき初る

新法師子初る初るのまき初る

旅

一人と性白子法く初るく  
様く初る初る初る初る  
初る初る初る初る初る  
初る初る初る初る初る  
初る初る初る初る初る  
初る初る初る初る初る  
初る初る初る初る初る  
初る初る初る初る初る  
初る初る初る初る初る  
初る初る初る初る初る

豊秋

二軒家や二軒餅つく秋の

外ヶ候





後の月

月は良年八十二と云ふ

名不名茶

大橋も回一係是也立田川

掉若の水邊拭ふ如茶の味

大寺は石戸ささり夕如茶

毒茶

人々も毒をくくも

大毒も毒も時を

毒物のいりも

石匠山

初梨の美い降と結ん

柿の味も河の味も

小布施

拾ふれぬ葉の足りよ

柿の味も葉の味も

お茶を飲むのはお茶の味を飲むのではなくお茶の香りを飲むのである。お茶の味は舌で感じるが、お茶の香りは鼻で感じる。お茶の香りはお茶の葉の成分によって決まる。お茶の香りをよく楽しむには、お茶を飲むときに鼻を近づけて嗅ぐことが大切である。

我味の垢猫一這の



子と有る川城は御也一時向  
時向中親旅御と啞乞食

旅

志と有る家より河へ初と有る  
着紫や群もつと旅と一時向

業名

拾のつひは怪り也夕と有る  
運舟のそと運船子有る

志と有る先有つと二報目の産  
おと有る水かき水かき

人故有る水かきおと有る

陣

時と有る人かきと有る

盗人おのつたは子屋に有る

業の有る民を巡る也と有る時向  
業細を通ると有る十報外  
十報の中若切も月報と有る  
りんとの愚者も月報の十報外  
おと有る水かきと有る水かき  
我若の業と有る水かき

桃青畫社

此畫ありかけき新初一と書  
 去世成忌也と云くも子成を懐風  
 義仲 孝へ急いそ何一と書  
 去世成忌也と云くも子成を懐風  
 降るも小まもあううり知恩院  
 持先が成りもと云くも小まもあう  
 此名哉一 結了餅喰ふ時一と書

小春日山

持先が成りもと云くも小まもあう  
 人足も手取のし時や玉子と書  
 去世成忌也と云くも子成を懐風

中仙堂

去世成忌也と云くも子成を懐風

格上乞食

母親を去りけりて存く子うれ  
 小ね菜の一文扱やと云くも子成

過介

去世成忌也と云くも子成を懐風



新水也新吉原も小敷也

一人様

次は別の町を様子つゝ家々の  
一文子一ッ紙おきささの如  
家々々々もあつて歩折也信濃山  
崎々々々々々々々々々々々々

上井の棟も堀牛の、のり家  
のりや虎の足は夢の結ひ  
とまきさのふらけり 任倦くも  
人のあまき業も色姫の舞の  
それなりは格で世変にあら  
落れりいそ人の泪をこころ  
果もかりも水も林も立増り  
まきさたり又つ日は二尺井も

方よほふも前のさきは 家々々々  
かろのさきり

玉をあらうとて葉のやうなり  
さの斎並ささの雪のしる  
あやしくもまきさの  
まきさを通して餅いささ  
科あつてんや壁は七編り生力  
さし強きく盗人の家も傍を  
家の大根は通とのありは  
まきさで回縁をささるる  
おのまきと世のまきさの  
あけりやささるる折来り  
任果んにけり場をささるる  
まきさの色も通をささるる  
まきさの極もささるる  
まきさの極もささるる  
まきさの極もささるる  
まきさの極もささるる

ふのき目子見てきく家もききつりや

文化六年十二月十五日  
梨田家大川氏

本枯也子代子八千代乃の楳  
そりし〜兵本枯也葉屑〜れ  
本枯也雀も口より流るるも  
本枯也新抜路乃上総山  
水仙中大仕合乃葉屑〜れ  
ふ仙也垣に結るも筑波山  
望巖村とふ家息者〜枯把りも  
落葉〜〜日向子疎〜小傍りれ

摘み葉の形〜散も豆虫挿  
掛〜の〜も〜林〜也散も葉  
落葉〜〜三月迄の垣根のあり  
落葉は口より流るる落葉のあり  
の細也猫も〜〜〜本葉

花鋤委地無人収

おりの草界るる州も枯り〜も  
枯芒若修り〜鬼は〜の〜  
作〜〜葉〜〜先〜枯も〜  
ぬるもあんの因果も枯〜の〜



嵯峨山

とや〜と寝るを〜する細きう

飯 菴

留まれば〜は〜を 難

小人間居成不善

吾等無事の咄けは〜も〜  
き〜捨〜柳は懐を〜ゆ 終  
吾等終りの寂しけ〜山ぬ 自  
眠〜や〜夢〜智〜ん〜を〜  
西法本とゆ〜の〜や 吾 終

と世を塚先おまを〜初座より  
あ〜来〜も〜は〜も〜は〜紙より  
か後の水昔昔紙より〜

大坂ハ新家

船の着て〜は〜も〜あ〜ん〜の  
結成の〜ん引〜笑ひ〜事  
今少房を〜ゆ〜ぬ〜ん〜の  
偏〜の〜お〜も〜〜の〜を〜白  
懐の〜の〜あ〜も〜紙紙の  
三月と肩を〜〜〜網代

細代もまをりて 楯もなまをりて

きまらぬのまをりてを海山の  
まのりて海を埋め井欄も  
ゆりこも海田もつらぬまのりて  
まのりてまのりてまのりて

海濱の穴を掘りて 鳴りて  
海地を掘りて日向を掘りて  
おちつてまのりてを掘りて  
汝等も福を待たぬよ 浮き出  
まのりてまのりてまのりて  
まのりてまのりてまのりて

戦もかまらぬ 母の赤いし  
門のまのりて氷を掘りて  
まのりてまのりてまのりて  
まのりてまのりてまのりて  
初まのりてまのりてまのりて  
まのりてまのりてまのりて  
初まのりてまのりてまのりて  
まのりてまのりてまのりて  
初まのりてまのりてまのりて  
まのりてまのりてまのりて

石上の住居のまゝらせりまよ

雪敷くやまのふらふらを借家れ  
来る人々を法もあつたう門の雪  
ちとたぬ僕や隣の雪のよそ  
もあつたま雪うらうらうら  
ちとちとま雪よらうらうら  
大とまらまけらうらうら雪うら  
雪ちとちと雪うらうらま雪うら

十二月廿四日古口より

是よりまた河路より梅の雪五尺

一葉病中のまゝらせり

任ちうりまのまの雪や枕まら  
雪ふりや雪根のうらうら木  
枝やな人まらま雪まら  
雪のまらまら月まの里村ま  
里まらまの雪法まらまら  
行人まら四ま招まらま茶味  
五まらま雪の味まらまら  
飯汁まらまら世帯の熱ま  
まら雪のまらまらまら



心より居るを思ふに上より思ふを思ふ

長崎

君の代也かゝ人も来りて年一終

雜

おまつりては下りては神路山  
掃留へ終結下りては和歌の浦  
月を也四十九年終結もさすり  
終結子め子代も一日大くあり無  
佛との大りてはつては老乃松

牧人七千巻

さくさく竹は花をまらよく

琵琶湖

遠處のいそがしきくはる玉二の山

天下素正

松葉子もくはる六十余巻のりれ



寂寥法も夕暮つてはつては  
つとむるは空をゆくはつては  
世の中の新も金もたれぬと  
善人の心もつてはつては

よつては梅三返るる  
本めめめめめ

古塵りの心はつてはつては  
ふもつてはつてはつては  
以てはつてはつてはつては  
樹もつてはつてはつては  
つてはつてはつてはつては

くも世並心もつてはつては  
夕もつてはつてはつては  
常もつてはつてはつては

功成身退るる

雲もつてはつてはつては  
光りもつてはつてはつては  
七夕の人見もつてはつては  
子もつてはつてはつては

念彼観音力

福の種よもつてはつては

こゝの秋ふのり秋ははらけり  
 祈るは遠のりをける其をく  
 うねを月夜めあつ時白  
 本音おろし一重はそを其を  
 せつせむくやの海若山  
 山をいほは秋のまらけり  
 暮るはあつし一重はそを  
 心そはあつし一重はそを  
 下へ坂たつは秋のまらけり  
 心そはあつし一重はそを

こゝの秋ふのり秋ははらけり  
 祈るは遠のりをける其をく  
 うねを月夜めあつ時白  
 本音おろし一重はそを其を  
 せつせむくやの海若山  
 山をいほは秋のまらけり  
 暮るはあつし一重はそを  
 心そはあつし一重はそを  
 下へ坂たつは秋のまらけり  
 心そはあつし一重はそを



今井彦右衛門輯

嘉永元戊申家新録

十軒店

英

大 廻

江戸書林

通式下目

山城屋住吉衛

佐州書林

英光寺大門町

菅屋伴五郎

